

方々歩いて旅すれば  
いろいろな出会いと  
発見がある。  
見て聞いて歩いた  
まちの旅日記。

## まちを歩く

vol.4

私の知る限り、建築に関わる知人の多くは古建築や町並みに興味を持ち、同時に「酒好き」であることが多い。勉強会・見学会においても決まってその日は「酒」で締めくくります。建築といってもその幅は広く、素面では率直な意見も言いにくいこともあるのです。しかし、「酒」の威力はすばらしい。肩書きも職種も瞬時に吹き飛んでしまうのです。が、たまに暴走轟沈というアクシデントもありましたが、普段においてはおおむね平和的時間を過ごし、可能な限りの「夢」に一同は浸っていくのです。

日本酒に限定した「お酒を楽しむ会」がある。

# 心で育てた名酒に出会う 銘柄「手取川」に込められた信念

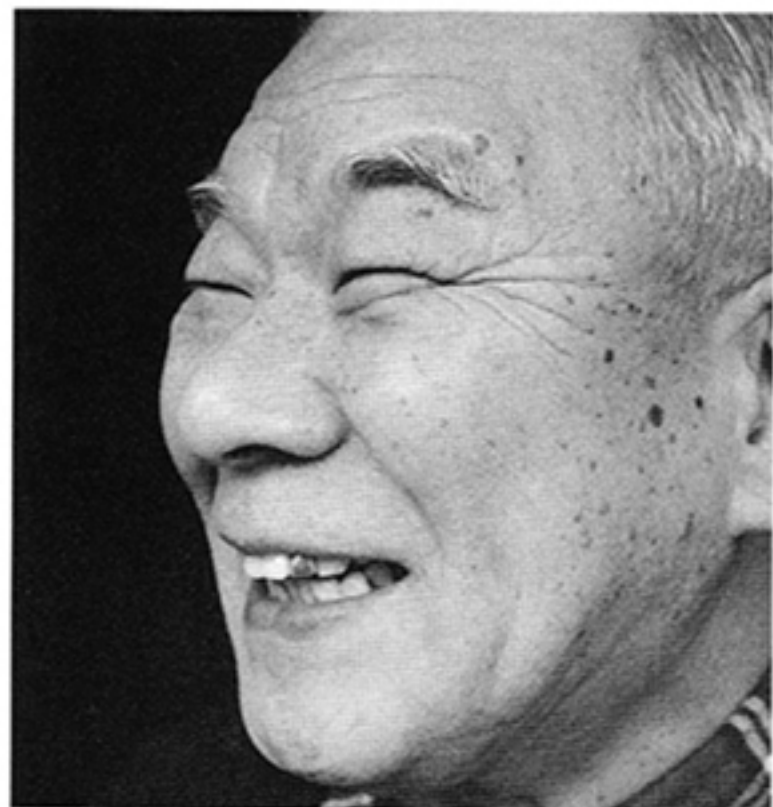
石川県松任市

写真・文 岡部知子

毎月一度開かれ、良品高価を避けた庶民型の会費設定になっている。定額の範囲から、全国各地の地酒を調達し、食事をしながら酒談義に花を咲かすのであるが、値段の割にいい酒であることが暗黙に望まれる。試飲して毎月選び出すとなると、選外になった銘柄は相当な数になってしまう。各人の味覚は大海ほど広く、銘柄の多さは山ほどあるのだから、想像すると気が遠くなってしまいが、逆にそれが助けになっているのかも知れない。ある時、全員一致で称賛された石川県の「手取川」がある。日本酒に精通、残りの人生をこれに賭けているH氏が語る談義のなかで「手取川は酒としても美味しいけど、社長が良い人だよ。事務所にしているお宅は古民家で、ペンガラの赤い壁は素敵だよ。仕込みの始まる頃にはまた行きたいなあ」と話しているの聞き、間髪を入れず「Hさん。そこを紹介して……頂けますか？」と酒席



▲一階は事務所兼店舗になっている



▲吉田外志雄さん

ならではの無礼に、即答でOKが返ってきた。「古民家」・銘酒「手取川」は望むところ。私の心はずでに石川県松任市にあった。後日H氏に連絡を取って頂き、石川へと向かった。松任駅からはタクシー。運転手さんには「吉田酒造へ……」と言っただけで目的地に到着した。その間10数分ではあったが車中の運転手さんが「この酒……好きですなあ」とつぶやくように言ったことが余韻に残っている。社長直々の迎えに恐縮したが、その背後には昭和初期の風情を残す「古民家」がドーンと控えているのです。お酒の香りをほのかに感じながら事務所を通り、座敷へと案内された。最後のふすまが引かれると、そこには楽しみにしていた「ペンガラの赤い壁」が目飛び込んできた。このシットリと落ち着いた赤の彩度は何なのだろう。刺激的な感覚ではなく、ゆっくりと気持ちが高揚して来る……そういう不思議なものを感じるのです。

吉田外志雄（としお）さんは昭和16年、吉田家の次男として生まれた。明治3年、創業時に建てられた元来の家は昭和28年に全焼してしまった。

吉田さんが小学5年生の時であった。原因は若い奉公人の失火であったが、当人の将来を考えた両親の判断により漏電ということを決着した。しかし、当時の警察もあまくない。小5であった吉田さんを何度も取り調べに呼び出したのである。両親の意向を理解していた吉田さんは、知らぬ存せぬを通しきった。辛かった……という気持ちはなかったという。ただ、全焼したために自身の衣類はなく、袖・丈をカットしただけの大人用の服を着せられて警察の取調べを受けたことが、妙に恥ずかしい気持ちで残っているのだと笑った。

戦後すぐの焼失で、すべての物資が不足していた当時であり、再建は困難を極めました。丁度そんな折り、安宅の間に廻船問屋が離れ屋とし



▲位置図



▲寒冷の手取川には粉雪が舞っていた



▲一枚板に彫られた欄間は見ごたえ充分



▲琵琶床の床板には空の立ったケヤキ、床柱は黒柿

て建てた家が売りに出ていると聞き、すぐに交渉を開始したのです。時勢ということもあり契約はすぐに成立、しかもこの家を建てた大工親子がまだ現役でいたということも判り、迷うことなく「解体移築」されたのです。

床の間は檜の一枚板に黒柿。京都から訪れた大工さん曰く、「床板は贅を尽くしている。この板の取りかたは、余程の太木でないかぎり、出来ないう芸当ですな」と感心していたという。欄間の製作者は不明であるが、一本の木から作られている素晴らしいもの。伝統芸「井波の欄間」がこの近くにはあるが、製作者がそれであるかどうかは定かでない。建具も全て移築前からのもので、障子

にあるガラスにも風情を感じる絵柄がほどこされている。しかし、移築時二階の部屋の造作等の仕上げはなされていなかった。元々の玄関の壁は鶯色であったという。朱の色は客間、群青色は殿様坊様の部屋に使用された（金沢の『成巽閣』は群青色の壁として周知されている）。座敷は田舎家でよく見る田の字型。この家も冠婚葬祭のときは、建具を外して使用していたといいます。

吉田酒造店の歴史のなかで、「業」を一時中断した時期がある。第二次世界大戦中の企業整備により酒造中止を余儀なくされたのである。そのうえ、タンクなどの金属類はすべて「供出」させら

れ、その後「戦開機」の製作に参加させられそうになったが、終戦を迎えたことで事なきを得た。その後（昭和21年）、休業していた蔵元3社が集まり「蔵」は復活され、平和酒造として再出発。まさに動乱期の旗揚げであった。そしてその4年後「吉田酒造店」として独立。先祖伝来の「手取川正宗」を継承したのです。しかし、この先祖の銘柄も諸事情により過去に2度ほど改名されていたのです。「手取川」に復活されたのは昭和56年の事でした。いずれにしても、銘柄を変える……という事の重要さは吉田さんにしか解らない。時の流れを心に焼き付けた吉田さん。

名將・木曾義仲が、源平合戦において、水流の厳しい「手取川（旧名平河川）」を、兵と供に手を繋いで渡ったという逸話が「手取川」には重なっている。「大量生産はしない。酒は人が造り、心で育てるもの……」。昔ながらの信念は、今日に至っても変わっていない。帰り道「手取川」の土手を歩いた。遠くに霞む白山に抱かれるように川が曲がりくねり、時空を越えた豊満な自然を感じていた……。私がここに立つことはもうないかも知れない。しかし、何処にいても「手取川」は飲んでいられる。そして、吉田さんが言っていた「一日一杯。常温で欠かさず飲むのが日課なんですよ！」と幸せいっぱい語ってくれた笑顔が、粉雪の舞う手取の川面に、ゆらいて見えた。

おかへ・ともこ



▲塗り直されて間もない酒蔵